

# 日韓スポーツの国際交流事業からみた国境を越える地域 間連携と持続可能な地域発展に関する研究

朴倬玄\*

抄録

本研究の目的は、日韓スポーツ交流の実態を分析し、日韓スポーツ交流が国境を越える地域間連携の構築にどのような役割を果たしたかを明らかにすることである。分析に際しては、日韓スポーツの国際交流へ参加した韓国参加者（成人 69 名、青少年 72 名）に対して、聞き取りを含むアンケート調査を行い、①参加前後に参加地域の関心・愛着・イメージの変化、そして②スポーツ交流が国境を越える地域間連携に与える役割、の 2 点を考察した。

分析結果、次の 3 点が明らかになった。第 1 に、相手参加者・開催地域を競争相手として認識されるのではなく、成人・青少年参加者ともに、無関心・否定的要素から関心・愛着・肯定的要素へと地域イメージの変化が確認された。第 2 に、成人・青少年参加者ともに、国際スポーツ交流大会の参加後にも人的交流を継続的に維持していることが明確になった。そして第 3 に、国際スポーツ交流事業の成果は、人的交流のみならず、競技力向上や海外へ進学希望、専門的技術の取得など、青少年の競技力やモチベーションの向上に大きな影響を与えた。

以上の結果から、スポーツを通じた国際交流事業は、参加者間の継続的人的交流に発展し、それが相手地域へのイメージ・関心・愛着の構築に大きく貢献する。個々の参加者によって構築された人的交流は、ソーシャルキャピタルとして現れ、それは国境を越える地域間連携の重要な柱となるとともに、グローバル化のなかで持続可能な地域発展と活性化の手がかりになるといえる。

キーワード：国際スポーツ交流、韓国、日本、地域間連携

---

\* 法政大学経済学部 〒194-0298 東京都町田市相原町 4342

# Cross border Relationship between Korea and Japan in terms of Sports Exchange Programs

Sohgen BOKU (Jonghyun PARK)\*

## Abstract

The purpose of this paper is to investigate the roles and contributions of sports exchange programs to the reinforcement of cross border relationship between Korea and Japan. In order to comply with the aim of the research, I carried out questionnaires, including in-depth interviews with relevant stakeholders and participants experienced in engaging in senior and junior sports exchange programs held in Ishikawa Prefecture and Fukuoka city in 2015. The following two points were focused on: (1) the changes in personal perspectives with impression, attachment, and interest regarding the host regions; and (2) the roles and contributions to cross border relationship.

The results are as follows: (1) both senior and junior participants have perceived their counterparts not as competitors but as favorable partners. Both groups refined their initial sentiments from indifferences and negative perspectives to affirmative ones, such as getting more interest and in-depth attachment. (2) The majority has kept up with their counterparts, which can lead not only to raising more interest in the host regions, but also promoting the intention to revisit these destinations. (3) For both seniors and juniors, the implication of these sports exchange programs influenced the establishing of personal relationships and improved impression, attachment and interest regarding the host regions. In addition, apart from the above, it motivated enhancing athletic performances and acquiring professional skills for the latter.

Sports exchange programs resulted not only in forging the social capital through developing interaction between the participants, but also in inducing homogeneous identities for each other. The findings of this study stress the decisive role played by local authorities and institutions which designed and held sports exchange programs. In turn, the participants can establish personal relationships with each other which came not to be temporary but permanent. It also can be shown that the accumulation of personal relationships created by sports exchange programs formulates cross border relationships and incites authorities to design measures for sustainable regional development.

Key Words : sports exchange programs, Korea, Japan, cross border relationship

---

\* Hosei University, Faculty of Economics, 4342 Aiharacho Machida-city Tokyo 194-0298

## 1. はじめに

スポーツを通じた国際交流は、地域社会においてスポーツの普及や発展に大きな貢献をするとともに、海外地域との友好親善の促進にも大きな役割を果たす。そのため、韓日の両国では、日本体育協会や大韓体育協会などスポーツ関連の政府機関や地方自治体レベルで、さまざまな国際スポーツ交流を行ってきた。そのなかでも、日本体育協会は、スポーツ交流、青少年交流の拡大を目指し、日韓両国政府の合意により「日韓共同未来プロジェクト」として、様々なスポーツ交流支援を推進してきた。

しかしこれらの交流事業が国境を越える地域間連携に具体的にどのような役割を果たしたのかを含めて、国際スポーツ交流と地域活性化との関連性まで解明した学術的研究は極めて少ない。

さらにスポーツを通じた国際交流は様々な都市・地域で活躍する選手や指導者の派遣によって推進されるため、本来ならば、個々の交流は国家単位ではなく都市・地域単位で分析すべきである。しかし個々の交流を、都市・地域間関係を構築する一つの要素としてとらえる研究は今まで行われてこなかった。

筆者は、地理学の国際的都市システム論の枠組みに基づき、地方都市の国際化と都市間結合依存関係を推進してきた(朴 2001、2006、2010、2011、2015)。こうした一連の研究成果から、ソウル、東京は、とりわけ経済諸機能のグローバル化によって、高次的国際機能や経済的中枢機能の集積が著しいことが明確になった。またソウルと東京は、経済諸機能の長期継続的かつ循環的集積と経済のグローバル化によって、持続可能な都市発展を果たし、世界都市という地位を獲得した。

とくに一極集中型の国土構造を持つ韓日両国では、首都一地方といった二極的空間構造から作り出された格差問題と、地方都市の地域活性化に非常に悩まされてきた。多数の地方都市では、地域活性化の一環として、ツーリズム、スポーツ交流など、地域住民参加型の国際交流事業を柱に、海外との交流を積極的に推進されてきた。それは、地方都市へ高次的かつ経済的中枢管理機能の誘致・集積が非常に困難であることで、地域住民主体型の国際交流が地域活性化の一つの方法であると判断されるからである。

そこで本研究では、政府レベル、地方自治体レベルで推進されている韓日両国の国際スポーツ交流事業に着目し、それが国境を越える地域間連携の構築にどのような役割を果たすのかを分析することにした。

スポーツ活動と地域活性化との関連性に関する先行研究は、観光地理学、スポーツ産業学などを中心に、さまざまな視点から分析されてきた。それは次の2つの視点に大別される。

第1に、スポーツイベントの効果に関する研究である。市民マラソン、オリンピックなどメガスーツイベントの開催は、地域活性化とツーリズム振興をめざし、社会的、経済的、環境的、文化的効果をもたらすことが指摘された(Balduck ほか 2011; Gursoy ほか 2011; Prayag ほか 2013; 山口ほか 2014)。

そして第2に、スポーツツーリズムに関する研究である。参加型スポーツ合宿やエリート・アスリートの合宿地選択行動に着目し、ホストとゲストとの行動分析や意思決定プロセスに関する研究が積極的に行われてきた(井口ほか 2006; 木村 2009; 押見ほか 2012; Higham ほか 2009; 渡辺 2014)。

以上の先行研究から、スポーツと地域活性化との関連性に関する一定の成果は確認された。しかし、次の点が今後の研究課題として指摘できる。まず、国内レベルのみならず、国境を越えるスポーツ交流事業に関する様々な研究が求められている。また、国際スポーツイベントを一時的に発生する単なる「ノード」としてみなすのではなく、「リンク」としてみなし、その「リンク」を構築・維持・強化する参加者やスポーツ政策などに注目することが必要であるといえよう。そこで、本研究を遂行することとする。

## 2. 目的

本研究の目的は、韓日両国の国際スポーツ交流を事例に、国際スポーツ交流事業が国境を越える地域間連携の構築にどのような役割を果たしたかを明らかにすることである。

## 3. 方法

本研究の分析対象は、①日本体育協会が推進する「第19回日韓スポーツ交流・成人交歓交流事業の受入事業(2015年9月17日~23日)」、②福岡市スポーツ協会が推進する「福岡市・釜山廣域市中・高校生スポーツ交流大会(2015年8月19日~21日)」である。

第19回日韓スポーツ交流・成人交歓交流事業の受入事業は、韓国京畿道から10競技193名、「福岡市・釜山廣域市中・高校生スポーツ交流大会」は5種目72名がそれぞれ参加した。

調査対象は、これらの国際スポーツ交流事業に参加する韓国側参加者(青少年72名、成人69名、本

部企画側3名)で、予備調査(2015年6月)、本調査(7月~11月)、面談調査(12月、2016年1月)を通じて、聞き取りを含むアンケート調査を行った。

調査対象の内訳は、青少年参加者(卓球13名、ソフトテニス11名、バレーボール19名、バドミントン18名、セーリング11名)、成人参加者(バドミントン14名、バレーボール17名、サイクリング15名、ボウリング11名、サッカー5名、バスケットボール4名、ソフトテニス3名)である。

アンケート調査では、①参加者の基本属性、②参加前後の開催地のイメージ・関心・愛着の変化、そして③本国際スポーツ交流事業の満足度などに関連する項目を設け、参加者に各設問に対して5段階評価による評点を求めた。

分析に際しては、釜山市と京畿道からの参加者が、国際スポーツ交流事業を通じて、開催地である福岡市と石川県への関心、愛着、イメージの認識にどのような変化がみられたのか、そして国際スポーツ交流事業の役割とその成果はどのようなものなのかを考察する。

#### 4. 結果及び考察

##### (1) 調査対象者の概要

表1は釜山市一福岡市交流事業の青少年参加者の概要を示す。参加者の性別をみると、男子が63.9%、女子が36.1%を占め、男子の参加者がやや多い。国際スポーツ交流への参加回数は2回以上が最も多く、全体の72.3%を占め、次いで1回である。参加経験が少ない事例は非常に少なく、国際スポーツ交流経験は豊かであるといえる。また初参加時期は、高校が全体の37.5%を占め、次いで中学校、小学校の順であり、多くの参加者が高校の時に国際交流事業に参加することがわかる。一方、参加地域の内訳をみると、日本が非常に多く、全体の94.4%を占めており、青少年の国際スポーツ交流が一部の地域に限定されているといえる。また参加者のうち、全体の48.6%は日本への訪問経験があり、福岡への訪問経験も、2回以上のケースが全体の37.4%を占める。

表2は、京畿道一石川県交流事業の成人参加者の概要である。参加者の性別をみると、男子が53.6%、女子が46.4%を占め、青少年参加者に比べて、男女の比率の差が比較的に小さい。国際スポーツ交流への参加回数は2回以上が最も多く、全体の60.9%を占め、青少年のそれに比べるとやや低い。参加経験の少ない参加者も、全体の20.3%であり、青少年参加者の結果とは対照的である。また初参加時期は高校が全体の51.4%を占め、次いで成人で、参加者の

多くが高校、社会人になってから国際スポーツ交流事業に参加することがわかる。一方、参加地域の内訳をみると、日本が全体の48.4%、中国が21.9%を占め、成人の国際スポーツ交流事業も、日本に集中的に展開されている。また、参加者のうち、全体の37.9%は日本への訪問経験があり、石川県への訪問経験も、2回以上のケースが全体21.2%を占める。

表1 釜山市一福岡市間交流事業の青少年参加者の概要

区分		人数	割合
性別	男	46	63.9
	女	26	36.1
国際スポーツ交流への参加回数	1回	17	23.6
	2回以上	52	72.3
	なし	3	4.1
国際スポーツ交流の初参加時期	小学校	14	19.4
	中学校	27	37.5
	高校	29	40.3
国際スポーツ交流の参加国	日本	68	94.4
	中国	24	33.3
	その他	7	9.8
国際スポーツ交流日本訪問経験	1回	35	48.6
	2回以上	35	48.6
	ない	2	2.8
国際スポーツ交流福岡訪問経験	1回	43	59.7
	2回以上	27	37.4
	ない	2	2.8

表2 京畿道一石川県間交流事業の成人参加者の概要

属性	区分	人	割合(%)
性別	男	37	53.6
	女	32	46.4
国際スポーツ交流経験	1回	13	18.8
	2回以上	40	60.9
	なし	14	20.3
国際スポーツ交流の初参加時期	中学校	3	8.6
	高校	18	51.4
	成人	14	40.0
国際スポーツ交流参加国	日本	35	48.0
	中国	16	21.9
	その他	22	30.1
国際スポーツ交流日本訪問経験	1回	25	37.9
	2回以上	21	31.8
	ない	20	30.3
国際スポーツ交流石川訪問経験	1回	28	42.4
	2回以上	14	21.2
	ない	24	36.4

(2) 釜山市—福岡市間交流事業の分析結果

【参加前後の開催地への関心・愛着】

まず、国際スポーツ交流の参加前における開催地への関心・愛着・イメージの構造に基づき、参加者の類型化を行う。分析に際しては、5つの項目（「参加前は福岡に関心があまりなかった」「参加前に福岡に愛着はなかった」「参加前に、福岡に行くのが不安だった」「参加前に、福岡はあまりなじみなかった」「参加前に福岡に行くのが怖かった」）別の参加者 72 名の評点をもとに、平方ユークリッド距離に基づくワード法階層クラスター分析を行った。グルーピングの過程でグループ間の距離が不連続的に変化する段階に着目して、4つのグループに抽出した。

第1クラスターには、34人が含まれる。このタイプの特徴をみると、「関心」「愛着」に関する評点は普通以上が多いこと、そして「恐怖感」「不安」「なじみがない」など排他的イメージを抱く傾向が強い。そのため、「平均的愛着・関心度を示す参加者」とであると名づけた。

第2クラスターには、18人が含まれ、「関心」「愛着」に関する項目には高い評点を与えている一方、「恐怖感」「不安」「なじみがない」といった項目に対する評点は低い。したがって、このクラスターは「愛着・関心・イメージを積極的かつ肯定的に示す参加者」とであると解釈した。

第3クラスターは、「関心」「愛着」に関する評価が相対的に高いことや、「恐怖感」「不安」を示す評価が低いことに特徴があり、3人が含まれる。したがって、このクラスターを「関心・愛着は示すが、恐怖・不安を示す参加者」と解釈する。

そして第4クラスターには、16人が含まれ、「恐怖感」「不安」「なじみがない」項目に特に低い評点が与えられ、「関心」「愛着」の項目には普通の評価が与えられた。したがって、このクラスターは「恐怖・不安など否定的側面を感じる参加者」とであると名づけた。

以上の分析結果から、釜山—福岡間国際スポーツ交流に参加する前は、積極的に福岡へ関心や愛着を示す第3クラスター（3人）を除くと、第1、第2、第4クラスターに含まれる参加者は、比較的福岡に対して無関心、無愛着、そして不安の要素を抱いていたことが明らかになった。

次に、国際スポーツ交流に参加した後、訪問先地域に対する愛着・関心がどのように変わったのかを明らかにするために、2つの項目に対して（「参加後、福岡に対して関心がもっとできた」「参加後、福岡に対して愛着がもっとできた」という項目に一次元配置分散分析を行った。

表3 「関心」に関する一次元配置分散分析

クラスター	度数	平均	標準偏差
1	34	3.706	.676
2	18	3.667	1.085
3	3	4.000	1.732
4	16	3.563	.964
合計	71	3.676	.891

	平方和	df	平均平方	F	確率
グループ間	.553	3	.184	.225	.879
グループ内	54.996	67	.821		
合計	55.549	70			

「関心」に対して、一次元配置分散分析を行った結果、統計的に有意なF値を得られず、グループ間の評点の違いが確認されなかった（表3）。

「参加後、福岡に対してもっと関心が高かった」の項目に対して、第1クラスター～第4クラスターの間、評点の平均値に対する統計的に有意な違いは確認されなかった。第1クラスターは、「そうである」（56%）、「とてもそうである」（9%）、第2クラスターは、「そうである」（39%）、「とてもそうである」（22%）、第3クラスターは「とてもそうである」（67%）、そして第4クラスターは「そうである」（31%）「とてもそうである」（19%）に評点が偏っている。すなわち、すべてのクラスターで、参加後、福岡に対してもっと関心を持つようになったことが統計的に有意であるといえよう。

また「愛着」に対しても、一次元配置分散分析を行った結果、統計的に有意なF値を得られず、グループ間の評点の違いが確認されなかった（表4）。

表4 「愛着」に関する一次元配置分散分析

クラスター	度数	平均	標準偏差
1	34	3.676	.684
2	18	3.778	1.003
3	3	3.667	1.528
4	16	3.438	.892
合計	71	3.648	.847

	平方和	df	平均平方	F	確率
グループ間	1.04	3	.347	.473	.702
グループ内	49.16	67	.734		
合計	50.20	70			

すなわち、「参加後、福岡に対して愛着がもっとできた」の項目に対して、4つのクラスターの間、評点に対して統計的に優位な違いが確認されな

った。第1クラスターは「そうである」(53%)、「とてもそうである」(9%)が最も多く、第2クラスターは「そうである」(44%)、「とてもそうである」(22%)、第3クラスターは「そうである」(33%)、「とてもそうである」(33%)、そして第4クラスターは「そうである」(31%)「とてもそうである」(13%)に、それぞれ高い評点を得られ、すべてのクラスターで、参加後、福岡に対して愛着がもってできたことが判明した。

以上の結果から、開催地を訪ねる前、訪問地域へ関心と愛着や親しみをそれほど感じられず、不安さえ感じた参加者が、訪問後、関心や愛着、親しみをを感じるようになったことが確認された。

### 【参加者の満足度と国際交流事業の効果】

ここでは、国際スポーツ交流事業から得られた成果と満足度との関連性を考察する。分析手順は、満足度に関する項目「福岡に滞在・訪問したことは一般的に満足する」の評点を被説明変数として、国際スポーツ交流事業とその成果に関連する13項目を説明変数として、変数減少法の重回帰分析を行った。

13項目の説明変数は、「2泊3日の交流期間は適切だ」「新しい技術を学んだ」「競技力・競技に対する感覚がよくなった」「国際的感覚を得られた」「日本文化を体験できた」「スポーツをする目標ができた」「釜山の代表選手というプライドをもつようになった」「国際大会に自信を持つようになった」「福岡に好感を持つようになった」「福岡地域の人々と参加者と仲良くなった」「帰国後も福岡の友達と連絡を取るようになった」「福岡についてよく知ることができた」「日本についてよく知ることができた」である。

表5 満足度と国際交流事業の効果

	平方和	df	平均平方	F	有意確率
回帰	21.979	4	5.495	15.097	.000 <sup>a</sup>
残差	20.382	56	.364		
合計	42.361	60			

R	決定係数	調整済決定係数	推定値の標準誤差
.720 <sup>j</sup>	.519	.484	.6033

	標準化されていない係数		標準化係数		t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
(定数)	.367	.460			.799	.428
新しい技術	.252	.115	.249		2.197	.032
国際的な感覚	.273	.104	.301		2.640	.011
参加者と交流	.298	.095	.315		3.146	.003
友達と連絡	.128	.064	.190		2.017	.049

被説明変数への寄与が明確に認められる説明変数のみが重回帰式の中に取り込まれ、同時にその寄与の相対的な大小を表わす標準偏回帰係数が得られた。

表5は、重回帰分析の結果を要約したものである。開催期間、スポーツそのものに対する成果、そして地域との関わりを表わす9項目は、有意な標準偏回帰係数を示さずに、重回帰式に取り込まれなかった。これに対して、「①新しい技術を学んだ」「②国際的感覚を得られた」「③参加者と仲良くなった」「④帰国後も福岡の友達と連絡を取るようになった」は正の効果認められ、得られた重回帰式が1%水準で有意であった。

とりわけ、F検定を行った結果、標準偏回帰係数が有意だった項目をみると、「①新しい技術を学んだ」(標準偏回帰係数0.249)、「②国際的感覚を得られた」(0.301)、「③参加者と仲良くなった」(0.315)「④帰国後も福岡の友達と連絡を取るようになった」、「⑥参加者と仲良くなった」(0.190)である。

以上の結果から、次の2点が読み取れた。第1に、参加者の満足度は、新たな技術や国際的感覚といった、国際大会の参加で得られる専門的要素によって説明される。この点から、国際スポーツ交流事業は、親善大会の性格が強いとはいえ、参加者にとって、エリート・アスリートとしての視野や向上心を高めることに積極的に寄与していると解釈できる。

そして第2に、参加者の満足度は、国際スポーツ交流事業を通じたアスリート同士で構築された人的ネットワークによって評価された。すなわち、参加者は、本国際スポーツ交流事業を通じて、選手同士のコミュニケーションを積極的に図ることで、国境を越える個々の友好関係を形成し、帰国後もその関係を重視しながら継続的に維持していることが明らかになった。

### (3) 京畿道—石川県スポーツ交流事業の分析結果 【参加前の開催地への関心・愛着】

まず、国際スポーツ交流の参加前における開催地への関心・愛着・イメージの構造に基づき、参加者の類型化を行う。分析に際しては、5つの項目(「参加前は、石川県に関心があまりなかった」「参加前に、石川県に愛着はなかった」「参加前に、石川県に行くのが不安だった」「参加前に、石川県はあまりなじみがなかった」「参加前に、石川県に行くのが怖かった」)別の参加者69名の評点をもとに、平方ユークリッド距離に基づくワード法階層クラスター分析を行った。グルーピングの過程でグループ間の距離が不連続的に変化する段階に着目して、4つのグループに抽出した。

第1クラスターには、10人が含まれる。このタイプの特徴をみると、「関心」「愛着」に関する評点は普通以上が多いこと、そして「恐怖感」「不安」「なじみがない」など排他的なイメージを抱く傾向が強い。そのため「平均的愛着・関心度を示す参加者」とであると名づけた。

第2クラスターには、20人が含まれ、「関心」「愛着」に関する項目には普通以上の高い評点を与えている一方、「恐怖感」「不安」「なじみがない」といった項目に対する評点は相対的に低い。したがって、このクラスターは「愛着・関心・イメージを積極的かつ肯定的に示す参加者」とであると解釈した。

第3クラスターは、「関心」「愛着」に関する評点や、「恐怖感」「不安」を示す評点が相対的に、普通または低いことに特徴があり、15人が含まれる。したがってこのクラスターを「関心・愛着の評価が弱く、恐怖・不安を弱く感じる参加者」と解釈する。

そして第4クラスターには、23人が含まれ、参加前に、無関心、無愛着であった参加者が多く、「恐怖感」「不安」「なじみがない」といった不安感を抱く項目に高い評点が与えられ、したがって、このクラスターは「無関心、無愛着で、恐怖・不安など否定的側面を感じる参加者」とであると名づけた。

以上の分析結果から、京畿道-石川県間国際スポーツ交流に参加する前に、石川県へ関心や愛着を持つ参加者は、第3クラスター(15人)に含まれているが、第1、第2、第4クラスターに含まれる参加者は、比較的石川県に対して無関心、無愛着、そして不安の要素を抱いていたことが明らかになった。

#### 【参加後の開催地への関心・愛着の変化】

次に、国際スポーツ交流に参加した後、訪問先地域に対する愛着・関心がどのように変わったのかを明らかにするために、2つの項目(「参加後、石川県に対して関心がもっとできた」「参加後、石川県に対して愛着がもっとできた」)に対して、一次元配置分散分析を行った。

「関心」に対して、一次元配置分散分析を行った結果、統計的に有意なF値が得られ、グループ間の評点の違いが確認された(表6)。この結果は、福岡の結果とは対照的である。

「参加後、石川県に対してもっと関心できた」の項目に対して、第1クラスター~第4クラスターの間、評点の平均値に対する統計的に有意な違いが確認された。すなわち、第1クラスターは、「そうである」(50%)、「とてもそうである」(50%)、第2クラスターは、「普通」(20%)、「そうである」(55%)、「とてもそうである」(25%)、第3クラスターは「普

通」(47%)、「そうである」(40%)、「とてもそうである」(13%)、そして第4クラスターは「そうである」(70%)「とてもそうである」(22%)に、それぞれ高い評価が得られた。すべてのクラスターに対して否定的評価は確認されず、各クラスター別に肯定的評価の度合いの違いが統計的に認められた。

表6 「関心」に関する一次元配置分散分析

クラスター	度数	平均	標準偏差
1	15	4.533	.6399
2	11	4.636	.5045
3	16	3.375	.5000
4	26	3.962	.3442
合計	68	4.059	.6665

	平方和	df	平均平方	F	確率
グループ間	14.774	3	4.925	21.026	0
グループ内	14.99	64	0.234		
合計	29.765	67			

表7 「愛着」に関する一次元配置分散分析

クラスター	度数	平均	標準偏差
1	15	4.467	.6399
2	11	4.455	.5222
3	16	2.938	.7719
4	26	3.846	.4641
合計	68	3.868	.8269

	平方和	df	平均平方	F	確率
グループ間	23.026	3	7.675	21.561	0
グループ内	22.783	64	0.356		
合計	45.809	67			

また、「愛着」に対して、一次元配置分散分析を行った結果、統計的に有意なF値が得られ、グループ間の評点の違いが確認された(表7)。この結果は、福岡のそれとは対照的である。

すなわち、「参加後、石川県に対して愛着がもっとできた」の項目に対して、4つのクラスターの間、評点に対して統計的に有意な違いが確認された。第1クラスターは、「そうである」(50%)、「とてもそうである」(40%)、第2クラスターは、「そうである」(50%)、「とてもそうである」(20%)、第3クラスターは「普通」(47%)、「そうである」(40%)、「とてもそうである」(7%)、そして第4クラスターは「そうである」(61%)「とてもそうである」(22%)に、それぞれ高い評価が得られた。

すべてのクラスターにおいて、「参加後、石川県

に対して愛着がもっとできた」と認識している人が多いものの、各クラスター別にその度合いの違いが統計的に確認された。

さらに、福岡市や石川県への参加者から得られる一次元配置分散分析の結果はそれぞれ異なるが、開催地を訪ねる前、訪問地域へ関心と愛着や親しみをそれほど感じられず、不安さえ感じた参加者が、訪問後、関心や愛着、親しみを感じるようになったことに共通点が確認された。

### 【参加者の満足度と国際交流事業の効果】

ここでは、国際スポーツ交流事業から得られた成果と満足度との関連性を考察する。分析手順は、満足度に関する項目「石川県に滞在・訪問したことは全般的に満足する」の評点を被説明変数として、国際スポーツ交流事業とその成果に関連する13項目を説明変数として変数減少法の重回帰分析を行った。

表8 満足度と国際交流事業の効果

	平方和	df	平均平方	F	有意確率
回帰	22.798	4	5.700	18.932	.000 <sup>b</sup>
残差	18.967	63	.301		
合計	41.765	67			

R	決定係数	調整済決定係数	推定値の標準誤差
.739 <sup>j</sup>	.546	.517	.5487

	標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	.426	.469		.910	.366
①	.307	.073	.376	4.190	.000
②	.315	.118	.294	2.663	.010
③	-.257	.120	-.251	-2.136	.037
④	.547	.137	.460	4.000	.000

13項目の説明変数は、「交流期間は適切だ」「新しい技術を学んだ」「競技力・競技に対する感覚がよくなった」「国際的感覚を得られた」「日本文化を体験できた」「スポーツをする目標ができた」「京畿道の代表選手というプライドをもつようになった」「国際大会に自信を持つようになった」「石川県に好感を持つようになった」「石川県の人々や参加者と仲良くなった」「帰国後も石川県の友達と連絡を取るようになった」「石川県についてよく知ることができた」「日本についてよく知ることができた」である。

被説明変数への寄与が明確に認められる説明変数のみが重回帰式の中に取り込まれ、同時にその寄

与の相対的な大小を表わす標準偏回帰係数が得られた。

表8は、重回帰分析の結果を要約したものである。開催期間、スポーツそのものに対する成果、そして、地域との関わりを表わす9項目は、有意な標準偏回帰係数を示さずに、重回帰式に取り込まれなかった。これに対して「①交流日程は適切だ」、「②日本文化を体験できた」、「④石川県に好感を持つようになった」は正の、「③国際大会に自信をもつようになった」は負の効果があり、それぞれ確認され、得られた重回帰式が1%水準で有意であった。

とりわけ、F検定を行った結果、標準偏回帰係数が有意だった項目をみると、「①交流日程は適切だ」(標準偏回帰係数 0.376)、「②日本文化を体験できた」(0.294)、「③国際大会に自信をもつようになった」(-0.251)「④石川県に好感を持つようになった」(0.460)である。

以上の結果から、次の2点が読み取れた。第1に、参加者の満足度は、交流日程が適切であること、そして日本文化の体験機会が与えられたこと、そして滞在地域に好感を持てるようになったことに、起因している。成人参加者の多くは、社会人であるために、参加できる環境づくりが最も重要である。また、参加者は、滞在地で日本文化の体験に満足し、結果として地域への好感をもつようになり、それが満足度の評価として現れた。

また、福岡市への参加者の分析結果とは対照的であることも注目される。成人参加者は、青少年参加者に比べ、エリート・アスリートとしての視野や向上心を高める変数に関しては、統計的に有意な結果が得られなかった。

## 5. まとめ

本研究の目的は、日韓スポーツ交流の実態を分析し、日韓スポーツ交流が国境を越える地域間連携の構築にどのような役割を果たしたかを明らかにすることである。分析に際しては、日韓スポーツの国際交流へ参加した韓国参加者(成人69名、青少年72名)に対して、聞き取りを含むアンケート調査を行い、①参加前後に参加地域の関心・愛着・イメージの変化、そして②スポーツ交流が国境を越える地域間連携に与える役割、の2点を考察した。

分析結果、次の3点が明らかになった。第1に、相手参加者・開催地域を競争相手として認識されるのではなく、成人・青少年参加者ともに、無関心・否定的要素から関心・愛着・肯定的要素へと地域イメージの変化が確認された。第2に、成人・青少年参加者ともに、国際スポーツ交流大会の参加後にも



人的交流を継続的に維持していることが明確になった。そして第3に、国際スポーツ交流事業の成果は、人的交流のみならず、競技力向上や海外へ進学希望、専門的技術の取得など、青少年の競技力やモチベーションの向上に大きな影響を与えた。

以上の結果から、スポーツを通じた国際交流事業は、参加者間の継続的人的交流に発展し、それが相手地域へのイメージ・関心・愛着の構築に大きく貢献する。個々の参加者によって構築された人的交流は、ソーシャルキャピタルとして現れ、それは国境を越える地域間連携の重要な柱となるとともに、グローバル化のなかで持続可能な地域発展と活性化の手がかりになるといえる。

#### 参考文献

- 井口 梓・小島大輔・中村裕子・星 政臣・金 玉実・渡邊敬逸・田林 明・トム・ワルデチュ 2006 「九十九里浜におおける観光の地域的特性－白子町中里地区のテニス民宿を事例に－」地域研究年報 28、pp.127-166。
- 押見大地・原田宗彦・佐藤晋太郎・石井十郎 2012 「スポーツチームの合宿地先行における意思決定プロセスの検討：高校・大学スポーツチームに着目して」スポーツ産業学研究 22-1、pp.9-27。
- 木村和彦 2009 「スポーツ・ヘルスツーリズムの対象と事例」（『スポーツ・ヘルスツーリズム』原田宗彦・木村和彦編）大修館書店、pp.47-62。
- 朴 侗玄 2015 「韓国の国家的都市システムにおけるサービス業の分布パターン」（『都市空間と産業集積の経済地理分析』近藤章夫編、日本評論社）、pp.167-198。
- 朴 侗玄 2011 「国際観光都市として済州市の役割と課題－アジアの国際的都市システムの視点と日本の事例を中心に」韓国観光研究学会秋期学術大会論文集 25、pp.251-262。
- 朴 侗玄 2010 「九州における自動車産業の集積と政策」経済志林 78-1、pp.143-172。
- 朴 侗玄 2006 『韓日企業のアジア進出からみたアジアの国際的都市システム』古今書院、258 頁。
- 朴 侗玄 2001 『東アジアの企業・都市ネットワーク－韓日間の国際的都市システムの視点－』古今書院、282 頁。
- 山口志郎・山口泰雄・野川春夫 2014 「市民マラソンのイベント効果が地域住民のイベントサポートに及ぼす影響－プリ・ポスト調査を用いた比較分析－」笹川スポーツ財団、pp. 140-148。
- 渡辺瑛季 2014 「首都圏外縁農山村地域における

スポーツ合宿自地域の成立システム」笹川スポーツ財団、pp.149-157。

Balduck, A., Maes, M., and Buelens, M. 2011. The social impact of the Tour de France: Comparisons of residents' pre- and post- event perceptions. *European Sport Management Quarterly* 11-2, pp.91-113.

Gursoy, D., Chi, C. G., Ai, J., and Chen, B. T. 2011. Temporal change in resident perceptions of a mega-event: The Beijing 2008 Olympic Games. *Tourism Geographies*. 13-2, pp.299-324.

Higham, J.E.S. and Hinch, T.D. 2009. *Sport and Tourism: Globalization, Mobility and Identity*. Oxford: Elsevier Butterworth-Heinemann.

Prayag, G., Hosany, S., Nunkoo, R., and Alders, T. 2013. London residents' support for the 2012 Olympic Games: The mediating effect of overall attitude. *Tourism Management* 36, 629-640.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

